

日本トランスパーソナル心理学／精神医学会第 19 回学術大会 大会テーマ『自然とスピリチュアリティの関係を考える』

大会会場：立教大学 新座キャンパス 4 号館 (N421～N434 教室)

以下の要領で、2018 年度の日本トランスパーソナル心理学/精神医学会の第 19 回学術大会を開催いたします。

第 1 日目はワールドカフェ、総会、理事会、研究発表のほかに長堀優先生（育生会横浜病院院長）に『縄文の心と自然、そしてスピリチュアリティ』と題する特別講演を頂きます。またこの講演に先立ち、聴く人のスピリチュアルな感性を刺激するとされる和太鼓演奏『響沁浴』の体験会を行います。なおこの特別公演は立教大学ウエルネス研究所の後援を受けて行なわれるため、学術大会から独立した公開講演会として行われます。また、講演会後には、特別講演会の講師の先生方にもご参加頂き懇親会を開催いたします。年に一度の本学会の交流の機会です。是非とも多くの皆様にご参加頂けますよう、よろしくお願い致します。

2 日目には分科会・研究発表の後、シンポジウム『自然とスピリチュアリティ』を開催します。講師として、自然環境系ライター鹿熊勤氏、NPO 生態教育センター理事奇二正彦氏（立教大学コミュニティ福祉学研究科 博士課程後期課程）をお招きし自然体験とスピリチュアリティの関連性に関して議論を深めたいと考えます。なおこのシンポジウムも立教大学ウエルネス研究所の後援を受けて行なわれるため、学術大会から独立した公開シンポジウムとして行われます。

なお大会会場である立教大学新座キャンパスへの最寄駅は、東武東上線、志木駅になります。志木駅近くにもホテルはありますが、志木から都心へは電車で約 20 分程度の距離ですので、都内に宿泊されることも可能です。

大会実行委員長 立教大学 コミュニティ福祉学部 濁川孝志

【タイムスケジュール】

第1日目 2018年12月23日（日曜日）

11:00～12:30：理事会（N4 2 4）

12:30：受付開始（N4 2 1前）

13:00：開会（N4 2 1）

13:10～14:50：ワールドカフェ『テーマ：自己の自然体験とスピリチュアリティ』（N4 2 1）

15:00～15:30：総会（N4 2 1）

15:30～17:30：特別講演（N4 2 1）

・『縄文の心と自然、そしてスピリチュアリティ』：長堀優（育生会横浜病院院長）

※講演者ご病気のため中止となり、急遽、濁川孝志先生（立教大学教授、大会長）による特別講演『星野道夫の神話』（15:30～16:30頃）を行っていただきました。

・和太鼓演奏『響沁浴』（千代園剛）

18:00～20:00時 懇親会（新座キャンパス内：『こかげ』）

第2日目 2018年12月24日（月曜日：休日）

9:30～11:30：研究発表（N4 2 3）

11:30～13:00：シンポジウム『自然とスピリチュアリティ』（N4 2 1）

13:00 閉会（N4 2 1）

【大会内容：12月23日】

ワールドカフェ：テーマ：自己の自然体験とスピリチュアリティ

13:10～14:50（N4 2 1+N4 2 3～4 3 4：5教室）

幼少期より現在に至る自己の自然体験を振り返り、それが現在の精神性、特にスピリチュアルな価値観や感性にどのように影響しているかを考えてみたいと思います。

ファシリテーター：奇二正彦氏

総会 15:00～15:30（N4 2 1）

響沁浴 15:30～16:00（N4 2 1）〔立教大学ウエルネス研究所後援〕

響沁浴とは、和太鼓の響き、波動を浴びながら、自分自身と向き合い対話する時間です。魂が和太鼓の響きと共鳴し、呼吸が深くなり、瞑想に近い状態になることがあります。潜在意識の扉を開き、客観的に自己をとらえる内観力を強化し、「自分の中にある答え」をあぶり出し、引き出すツールとされています。長堀先生のご講演を頂く準備として、静かな心と呼び戻す体験を皆さんで共有したいと思います。

演者：千代園 剛（ちよぞの たけし）氏

洗足学園音楽大学大学院音楽研究科修了。東京邦楽コンクール 現代音楽会協会賞受賞。フランス JAPAN EXPO(ジャパンエキスポ)参加。東北大震災後は毎年被災地を演奏訪問。また、2017年3月フィリピンマニラで行われた国際的な平和会議、グローバルピースコンベンションにて各国の首相などVIPの前で和太鼓演奏、フィリピンの幼稚園や小学校、台湾の病院などで演奏やワークショップを開催するなど和太鼓で世界を繋ぐ活動を行う。近年は独自のメソッド「響沁浴」で、和太鼓のもつ人の心への効果や新たな楽しみ方を提唱している。

公開講演会：縄文の心と自然そしてスピリチュアリティ [立教大学ウエルネス研究所後援]

16:00～17:30 (N4 2 1)

今、世界は大きな分岐点に差し掛かっています。

物質の豊かさや経済効率を追い求めてきた現代社会は、これほど豊かになったにも拘らず、結局は人々に心の安定をもたらすことはありませんでした。将来に目を転じて、物質もお金も有限である以上、飽くなき欲望のままに求めることだけを考えていては、今の社会、経済システムが長く続くわけはありません。もはや環境も経済もエネルギーも医療もまったなし、いつ破局が来てもおかしくありません。

“大切なものはね、目には見えないんだよ。目では見えない、心で探さないと。”
(サンテグジュペリ・星の王子様)

サン・テグジュペリは、物質や金が支配する世の行く末を見通していたのでしょうか。いまや、人類は、魔法使いの弟子のように、自分たちの手で作り出したものが自分たちの手に負えない、そんな状況をつくりだしてしまったのです。一体いつごろから、日本はこのような国になってしまったのでしょうか。

ここで明治時代の日本を振り返って見ましょう。大森貝塚の発見で知られるエドワード・モースは、日本人の礼節、道徳心の高さをたたえ、さらには、人々が正直である国にいることは実に気持ちが良いと述べています。さらには、彼ら維新直後に来日した外国人を驚かせたのは、幸せそうな日本人、とりわけ子供たちの表情であり、モースは、世界中で日本ほど子供が大切に扱われている国はないとまで述べています。決して豊かでも便利でもないけれど、限りあるものを分かち合いながら、人々が幸せに暮らしていた時代が偲ばれます。

米国領事ハリスの通訳を務めたヒュースケンも、「いまや私が愛しさを覚え始めている国よ、この進歩はほんとうにお前のための文明なのか」とまで述べていますが、その言葉を待つまでもなく、毎年の自殺者が三万人を超え、子供達への虐待のニュースが引も切らない社会を作り上げてしまった日本人が失ったものの大きさを今更ながら感じます。しかし、その日本人の美しい心根は、決して消え去ったわけではありません。

あの東日本大震災以来、本来の日本人の精神性が呼び覚まされつつあるのです。今の文明生活から得た恩恵は否定しませんが、しかし、もう一度自分たちの心の奥深くに眠

っているはずの礼節、道徳心をしっかりと呼び戻すことができれば社会はもっと良くなるのではないのでしょうか。

なぜ、このような国民が生まれてきたのか、そこには、自然環境のみならず、もっと深いこれまで公にされてこなかった日本の国の成り立ちがあるように思えてなりません。1998年、青森県外ヶ浜町にある大平山元遺跡において発見された土器の中には、推定一万六千五百年前とされたものがありました。紛うことなき世界で最も古い土器です。さらには、縄文時代に埋葬された人骨からは全く争ったあとがありませんでした。つまり、縄文という時代が、豊かな風土と食に恵まれ、世界にも類を見ないほどの高度な文明を築き、1万年以上にわたって集団で人が殺しあうことのなかった平和な時代であったことがわかってきたのです。

平和な社会、豊かな自然、多様なものの共存、すべての人々の幸せ、これこそが、今のこの世界に求められているのであり、この縄文の心こそが、日本人の精神性のルーツではないのでしょうか。

日本人が本来の姿に気づき、DNAの奥底に今なお息づく縄文の心を思い出し、自信を持って前に進むこと、そこに世界の将来がかかっていると私は考えています。

講師：長堀 優（ながほり ゆたか）氏

一般財団法人育生会横浜病院院長。平成5年ドイツ・ハノーファー医科大学に留学（ドイツ学術交流協会奨学生）、その後横須賀共済病院外科医長、横浜市立みなと赤十字病院外科部長、財団法人船員保険会横浜船員保険病院副院長・外科部長などを経て、平成28年より現職。著書『見えない世界の化学が医療を変える—がんの神様ありがとう』（でくのぼう出版）、『日本の目覚めは世界の夜明け—今蘇る縄文の心』（でくのぼう出版）

懇親会： 場所：新座キャンパス『こかげ』 18:00～20:00 会費5000円

【大会内容：12月24日】

研究発表 9:30～11:30 (N4 2 3)

公開シンポジウム『自然とスピリチュアリティ』〔立教大学ウェルネス研究所後援〕

11:30～13:00 (N4 2 1)

豊かな自然環境が人のスピリチュアリティを醸成するという知見が散見されますが、このシンポジウムではそれらの知見をベースに、自然環境が人のスピリチュアリティに及ぼす影響について考えてみたいと思います。議論の前提として鹿熊勤氏、奇二正彦氏より本テーマに関連するご講演を30分程度頂き、それを基に議論を深めたいと考えま

す。

「自然と神と縄文人」 鹿熊勤

自然資源にのみ依存した生き方でありながら、縄文時代がそれ以前の旧石器時代と異なるのは、定住生活を始めたことである。契機は1万5000年ほど前に起きた急激な地球温暖化（氷河期の終焉）で、植生をはじめとする生物相が大きく変化した。草原の大型動物（ナウマンゾウ、オオツノジカなど）を対象としたリスクな狩猟生活から、クリなど澱粉質を豊富に含む広葉樹の堅果と、それら広葉樹の森に潜むイノシシ・シカなどの中型動物、海進で内陸部まで広がった浅海域の豊富な魚介類を組み合わせ、より安定性のある狩猟採集生活への移行が実現した。遊動型のテント生活から堅穴住居での定住に変わったことで調理方法にも変化が現われる。土器の多用である。土器は現代でいう鍋であり、骨までスープ化でき栄養摂取効率がきわめて高い。また、クリはすでに栽培的な管理や品種改良のようなことが行なわれていたことがわかっている。縄文時代はおよそ1万年続いたが、規模の大きな拠点集落では数千年にわたり同所での生活が維持されたところもある。それほど長く続いたのは、日々の暮らしが十分に満ち足りたものであったからだろうと想像できるが、物質的な豊かさだけでは説明できないのが縄文時代の持続性である。

縄文という時代を読み解くうえで欠かすことができないのがスピリチュアリティであろう。象徴が表面の縄目文様と、ときに芸術といってもよいほどの造形が加えられた土器である。人型をした土偶にも縄文人の何らかの思いが込められているはずだが、残念ながらそれらの意味は現代人のわれわれは正しく解読できていない。しかし、文様や造形に込められているのは明らかに精神的なメッセージである。縄文人は祭祀を盛んに行なっていたこともわかっている。一般にごみ捨て場と位置づけられる貝塚も、捨て場よりは生命の宿ったあらゆるものに感謝し再生を祈る、送りの場という解釈のほうが適切だという人もいる。アイヌの熊送りの儀式や神話、さらに北米先住民などの伝説や儀礼にも、自然への畏怖と感謝、持続性を損なう考えや行動への戒めの思想が見られる。縄文人も同様の心を持っていたと考えた方が自然であろう。

諏訪大社の御柱祭や御頭祭といった神事のルーツをたどると、そこには縄文人が信仰した在地の古い神（国津神）と、新たに地上を統治した天津神との交代劇の残像をみることができる。縄文人は貧しく、重労働に耐え、気まぐれな自然の幸を採取することに日々汲々としていたように思われることもあるが、その実労働時間は1日4時間ほどでよかったという。縄文土器の芸術性も盛んな祭祀も、そうした「ゆとり」を抜きに考えられない。また、子供の頃にポリオに罹患した成人女性の骨や、歯がすっかり抜け落ちた高齢者の頭骨などの出土例は、福祉のようなセーフティーネットがすでに存在したことを窺わせる。今日のさまざまな社会的課題について考えるときも、縄文人の生き方は示唆に富んでいる。

「自然体験とスピリチュアリティの関係」 奇二正彦

1. 研究の背景

私たちの国は、戦後の貧困から復興し、高度経済成長を経て世界有数の経済大国になりました。その一方で、自殺・うつ病・ニート・引きこもり等の現代社会病理や、環境問題は深刻さを増しています。このような問題の解決方法の一つとして、価値観の変化、特にスピリチュアリティの醸成が関わるという知見があります。そうした社会的背景のもと、私は、自然体験とスピリチュアリティの関係について研究をしています。

2. スピリチュアリティとは何か

スピリチュアリティという言葉は、医療、健康、芸術、教育など、多方面で使われており、定義することが難しい概念です。語源は、スピリトゥス (*spiritus*) というラテン語で、「息」「魂」「霊魂」といった意味を持ち、生きものを動かす非物質的な力として理解されていたようです。そして、ユダヤ・キリスト教文化においては、人間に吹き込まれる「神（父）の息」と考えられていました。しかし、1960 年台に米国で起こったカウンターカルチャーの影響により、スピリチュアリティという概念は一般化しました。さらに、1998 年に WHO（世界保健機関）が、健康の定義に“spiritual”追加の提案をしたことから、医療関係者を中心にスピリチュアリティに関する論文数が急増しました。また、国連が 2001 年から 2005 年に実施したミレニアム生態系評価 (Millennium Ecosystem Assessment: MA) では、自然が人間にもたらす福利を意味する「生態系サービス」の 1 つに、スピリチュアルをあげています。

3. 研究の紹介

自然体験とスピリチュアリティに関する研究を 3 つ紹介します。

① 短期的な自然体験は、スピリチュアリティを醸成するか

越後三山只見国定公園は、湖に大イワナが泳ぎ、空にイヌワシが舞い、森にツキノワグマが棲む素晴らしい山岳公園です。そこで毎年夏、5 日間に渡ってカヌー、ハイキング、星空観察、テント泊などを体験する授業を行っています。受講者には、スピリチュアリティ、精神的健康度、生きがい感に関する質問紙調査に協力してもらい、授業の前後でどのような変化が起こるか測定しました。その結果、授業後に受講者のスピリチュアリティは醸成され、精神的健康は高まり、生きがい感も向上する傾向があることが示唆されました。

② 過去の自然体験とスピリチュアリティの関係

過去、自然体験を豊富にした人とそうでない人では、現在のスピリチュアルな感性に違いがあるのではないかと考えました。そこで、自然体験の多寡を測定する質問紙を作成し、スピリチュアリティ、精神的健康度、生きがい感に関する質問紙と合わせて調査を行いました。その結果、過去の自然体験が豊富な人ほど、スピリチュアリティが醸成され、また、生きがい感が高い傾向にあることが示唆されました。

③ 星空観察とプラネタリウム鑑賞におけるスピリチュアリティの醸成について

毎年、越後三山只見国定公園における 5 日間の授業に参加した学生からは、夜の星空に感動したという感想が多く聞かれます。そこで参加者を、実際に星空を観察するグループと、プラネタリウムを鑑賞するグループの 2 つに分けました。さらに、それぞれのグ

グループを、スピリチュアリティの高いグループと低いグループに分けました。その上で、気分、生きがい感、精神的健康度、スピリチュアリティに関する質問紙調査を体験の前後で実施しました。その結果、実際に星空を観察するグループにおいては、スピリチュアリティの高低に関係なく、体験後に気分が良くなる事が示唆されました。一方、プラネタリウムを鑑賞するグループでは、スピリチュアリティの高いグループのみ、体験後に気分が良くなる事が示唆されました。

講師紹介：

鹿熊勤（かくま つとむ）氏

情報工房「緑蔭風車」代表。立教大学兼任講師。ルポルタージュ、評論、書評のほか、通販事業の構成・戦略支援など、さまざまな「考えて書く仕事」を手がける。テーマ圏は「地域活性」「産業」「自然・環境」「教育」「文化」「ライフスタイル」。環境省エコインストラクター人材育成事業検討委員、環境省エコツアーガイド育成事業検討委員、農林水産省生物多様性向上農業拡大事業検討会委員、環境省環境教育・ESD人づくり基礎強化業務検討委員などを歴任。NPO法人日本エコツーリズムセンター理事。著書：『糧は野に在り』『野山の名人秘伝帳』『紀州備長炭に生きる』（農文協）『葉っぱで2億円稼ぐおばあちゃんたち』『木を読む』『仁淀川猟師秘伝』『鍛冶屋の教え』（小学館）ほか多数。

奇二正彦（きじ まさひこ）氏

立教大学コミュニティ福祉学研究科博士課程後期課程在籍。専門は環境教育。様々な自然環境でインタープリターとして活動。近年は、都市におけるマンションの緑の可能性という視点を持ち、「自然と自然」「自然と人」「人と人」の3つのつながりを統合したコミュニティ形成のあり方に注力している。立教大学文学部卒業。ニュージーランドの美術学校、JEEF 自然学校指導者養成講座、動物カメラマン平野伸明氏の助手を経て、株式会社生態計画研究所主任研究員、NPO生態教育センター理事。帝京科学大学非常勤講師。日本トランスパーソナル心理学／精神医学会会員。

進行：濁川孝志（立教大学コミュニティ福祉学部）

【研究発表：抄録】 座長：小室弘毅先生（関西大学）

1. 9:30~10:00 (N4 2 3)

自然体験の多寡を測定する尺度（Survey for Nature Experience 2）の 開発

嘉瀬 貴祥¹⁾、奇二 正彦^{2,3)}、濁川 孝志⁴⁾

1) 立教大学現代心理学部、2) NPO法人生態教育センター、
3) 立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科、4) 立教大学コミュニティ福祉
学部

キーワード：自然体験，尺度，妥当性，信頼性，スピリチュアリティ

【目的】

近年では、自然体験の多寡が精神的健康や生きがい感、生活の質（Quality Of Life : QOL）等に肯定的な影響を与える可能性を示した研究が散見されるようになった（e.g., Heintzman, 2009 ; McDonald et al., 2009 ; 中右ら, 2009）。しかしながら、自然体験に関する研究の大部分は定性的であるため、これらの研究から得られた知見を一般化するには、定量的な研究が必要であると指摘されている（Heintzman, 2009）。自然体験の多寡に関する定量的な研究を行うためには、他の心理指標同様、自然体験の多寡を測定する尺度の作成が必要である。自然体験の多寡を測定した調査として、平成18年より継続して調査されている「青少年の体験活動等に関する実態調査（青少年教育振興機構, 2016）」があるが、この調査で使用されている尺度は、理論的背景の検討や、妥当性や信頼性などの統計的な検証を経て作成されているかは明確ではない。そこで本研究では、これらの調査の内容をふまえたうえで、定量的な研究で使用することのできる自然体験の多寡を測定する尺度（Survey for Nature Experience 2 : SNE2）を作成することを目的とした。

本研究では、奇二ら（2017）で作成された自然体験の多寡を測定する尺度（SNE）の質問に加えて、「青少年の体験活動等に関する実態調査（青少年教育振興機構, 2016）」において使用された自然体験に関する質問を収集し、SNE2を構成する質問項目を選定することとした。これらの質問項目に加え、外的な基準となる複数の心理尺度と合わせて質問紙調査を行い、SNE2の内容と自然体験の多寡に関する理論的背景との対応、および信頼性と妥当性の統計的な検証を試みた。

【対象と方法】

1) 調査対象者

都内にある大学に在学する大学生157名を対象として、集合調査法による質問紙調査を無記名制で実施した。回答に欠損が認められた者を除いた148名（男性54名、女性94名；平均年齢18.87歳、 $SD = 1.11$ ）を分析対象とした。

2) 調査内容

自然体験の多寡を測定する質問紙を構成する質問項目（奇二ら，2018；18項目）と、青少年の体験活動等に関する実態調査（青少年教育振興機構，2016；10項目）を集約した。これらの質問項目を、意味内容に重複が生じず、日本人が生活のなかで体験することのできる自然体験を網羅できるように研究者間で討議し、全28項目を用意した。これらの質問に対し、5件法（1：まったくあてはまらない～5：よくあてはまる）で回答を求めた。

加えて、尺度の基準関連妥当性を検証するために、Japanese Youth Spirituality Rating Scale (JYS；濁川ら，2016)、PILテスト日本語版 (PIL；PIL研究会，1993)、日常生活スキル尺度（下位尺度である感受性のみ使用；島本ら，2006）を用いた。

【結果】

1) 因子分析

スクリープロットや各種指標（固有値，対角 SMC，MAP），および最尤法プロマックス回転による探索的因子分析の結果をもとに、解釈可能性の高い4因子構造を採用した。さらに、因子負荷量が.35以下を示す項目を除いた結果、SNEを構成する22項目が得られた（表1）。質問項目の内容より、第1因子は『恵みを得る自然体験』、第2因子は『五感を伴う自然体験』、第3因子は『素朴な自然体験』、第4因子は『スポーツ的な自然体験』と命名された。

表1 SNE2を構成する質問項目と因子構造

恵みを得る 自然体験	15	山菜採りやキノコ・木の実などを採取したことがある
	17	植林・干ばつ・下草狩りなどをしたことがある
	22	草や木でかぶれたことがある
	16	干物・燻製・ジャムづくりなどの食品加工をしたことがある
	21	木から落ちそうになったことがある
五感を伴う 自然体験	20	湧き水や井戸水を飲んだことがある
	19	野山で草木のにおいを感じたことがある
	7	自然物（種や実、枝、石、骨、つる植物など）を使って遊んだことがある
	8	野外で、虹や花や星や虫など、何かを見て感動したことがある
	11	生き物を殺した経験がある
素朴な 自然体験	18	米や野菜を植えたり育てたりしたことがある
	5	野鳥をみたり鳴く声を聞いたことがある
	1	チョウやトンボなどの昆虫を捕まえたことがある
	3	大きな木に登ったことがある
	4	ロープウェイやリフトを使わずに高い山に登ったことがある
スポーツ 的な 自然体験	10	親が自然体験が好きでよく連れて行ってもらっていた
	9	友達だけで自然の中で探検ごっこや秘密基地作りをしたことがある
	6	海や川で泳いだことがある
	13	乗馬や乳しぼりなど、動物とふれあったことがある
	14	スキーや雪遊びなど、雪のなかで活動したことがある
	12	ボート・カヌー・ヨットなどをしたことがある
	2	海や川で貝をとったり魚を捕まえたことがある

注) 番号は質問紙における順番を示す。

2) 基礎統計量と信頼性係数の算出

SNE2の合計得点および各下位尺度得点を算出した。平均値と標準偏差の値より、天井効果と床効果は認められなかった。また、内的一貫性の観点より尺度の信頼性を検討するためにCronbachの α 係数を算出したところ、合計得点と各下位尺度得点ともに一定の信頼性を有していることが確認された ($\alpha = .72$ to $.88$)。

加えて、SNE2の合計得点および各下位尺度得点間におけるPearsonの積率相関係数を算出した。その結果、すべての得点間で有意な正の相関が認められた ($r = .43$ to $.81$, $p < .01$)。

3) 基準関連妥当性の確認

SNE2の基準関連妥当性を確認するため、JYS, PIL, 感受性と、SNE合計得点および各下位尺度得点間におけるPearsonの積率相関係数を算出した。結果を概観すると、JYSでは下位尺度である自律の得点意外とは正の相関 ($r = .20$ to $.46$), PILと正の相関 ($r = .19$ to $.28$), 感受性と正の相関 ($r = .19$ to $.27$) が認められたが、SNE2の下位尺度ごとに関係性が異なることも確認された。

【考察】

本研究より、一定の信頼性と妥当性を有したSNE2が作成された。また、4つの下位尺度が抽出されたことで、自然体験の多寡を体験の種類ごとに測定、評価することができる。これにより、自然体験の多寡に関する定量的な研究を行うことが可能となった。

【引用文献 (一部)】

- 奇二正彦・嘉瀬貴祥・濁川孝志 (2018) 「自然体験がスピリチュアリティの醸成に及ぼす影響」『日本トランスパーソナル心理学／精神医学会誌』17 (1), 68-83.
- 青少年教育振興機構 (2014) 「青少年の体験活動等に関する実態調査」『国立青少年教育振興機構サイト』Retrieved from http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/107/ (2018年10月10日)
- 濁川孝志・満石 寿・遠藤伸太郎・廣野正子・和 秀俊 (2016) 「日本人青年におけるスピリチュアリティ評定尺度の開発」『トランスパーソナル心理学／精神医学会誌』15 (1), 87-104.
- PIL研究会 (1993) 『生きがい—PILテストつき—』河出書房新社.
- 島本好平・石井源信 (2006) 「大学生における日常生活スキル尺度の開発」『教育心理学研究』54 (2), 211-221.

2. 10:00～11:00 (N4 2 3)

河合隼雄の「心理臨床科学」とスピリチュアリティ

戸田弘子

妙龍寺こころの相談室・一般社団法人こころの臨床

キーワード：臨床心理学・河合隼雄・宗教・心理臨床科学・スピリチュアリティ

【目的】

心理専門職国家資格化達成への方略として、医療領域に限らない汎用資格を目指した人びとは、自らの領域を「心理臨床科学」という新しい科学であると標榜してきた。その人びとの中でも傑出した指導力を揮ったのが、臨床心理学者河合隼雄（1928-2007）である。

河合が重視した概念に、「臨床の知」がある。「臨床 clinic」は近代医療の占有と見られるべきではなく、医療を含む癒しの営みであり、スピリチュアリティが深く関与する。

「心理臨床科学」の、スピリチュアリティ（〈霊性の次元〉）への向き合う姿勢を探ることにより、臨床心理学が近代「科学」と切り結ぶ諸相が逆照射される。

このたびの発表では、河合が目指した「心理臨床科学」とはどのようなものであったのか、また「臨床」の営みに欠かせないスピリチュアリティを河合はどのように扱おうとしたのかについての試論を報告したい。

【方法】

河合隼雄が学術団体機関誌等で、「科学」「宗教」「たましい」について記した箇所を抽出し、それらが語られた時代背景を参照しながら論考を進める。

【考察】

河合隼雄は、80年代前半から世間の注目を集めはじめ、彼の提唱する「ユング心理学」「心理療法」が広く知られるようになった。1972年に日本臨床心理学会を離脱した河合らは日本心理臨床学会を設立し、河合らが心理療法の有効性を主張した社会への啓蒙が、1989年の臨床心理士認定資格化に貢献した。当時日本にニューサイエンスの思潮が上陸し、科学の発達と「精神世界」との折り合いに関わる議論が高まった。一方、新宗教・新々宗教が、大学という諸科学を教授する機関の中に布教の場を拓きはじめた。1986年の『宗教と科学の接点』で河合は、「心理療法」は「広義の科学」であり「広義の宗教」でもあると述べた。これは、〈異なる両界を結び合わせようとする〉巫者の営為を思わせる。

論文「精神療法の深さ」では、心理臨床は医療領域を侵犯しないよう自戒せねばならないが、医学にない独自性を「悟り」に類した「深い体験をもつ」ことで補うので、この「宗教モデル」での治療は心理臨床家に任せて貰いたいと主張する。これらの論述で河合は、宗教に纏い付く「うさんくささ」の除去を断行した。巫者の特質を持ち合わせた政治家として河合は、〈無記〉を堅持することでスピリチュアリティとの距離を取る「心理臨床科学」の社会的展開の方略を方向付けたのである。

心理療法は、行間を読み-書きする相互交流の中に在る。この実践の理論構築(言語化)は、臨床的勘を錬磨し続ける終わりなき(Freud,S.)道だ。これを方法論の致命的欠陥(科学性の欠如)とみるのか、或いは「新しい科学」と主張するのか。後者を選ばざるを得なかったのが、河合隼雄の心理臨床の「科学」であった。

【立教大学への交通アクセス】立教大学ホームページをご覧ください。

会場所在地 : 〒352-8558 埼玉県新座市北野 1-2-26 立教大学新座キャンパス
4号館 N4 2 1 ~N4 3 1

東武東上線 志木駅(南口)より 徒歩 15分

路線バス(西武バス)約10分 ⇒志木駅南口2番バス乗り場より「清瀬駅北口行き」
または「所沢駅東口行き」にて、「立教前」下車

立教大学HP URL⇒ <http://www.rikkyo.ac.jp/access/niiza/>

* : 志木駅へのアクセスは、東武東上線「池袋駅」より急行、快速にて約20分

* : 大会会場である立教大学新座キャンパスへの最寄駅は、東武東上線、志木駅になります。志木駅近くにもホテルはありますが、志木から都心(池袋)へは電車で約20分程度の距離ですので、都内に宿泊されることも可能です。

【参加の申し込み】

大会参加を希望される方は、以下の要領で、所属、氏名、会員資格の有無、懇親会参加の希望を記載のうえ、大会専用メールアドレス宛にメールで申し込んでください

(jatp2019@gmail.com)。学生(院生)の方は、所属のところに学生と加えてください。

なお申込みがなくても、当日参加は可能です。

氏名

所属

本学会会員 非会員 JTA会員(日本トランスパーソナル学会)

懇親会 参加する しない(空席があれば当日参加も受け付けます)

参加費 円を 銀行口座に振り込む

連絡用メールアドレス(必須)

「学術大会参加費」この中から選んでください

学術・一般会員 4000円(当日5000円)

学生会員 2000円(当日3000円)

非会員 5000円(当日6000円)

非会員学生 3000円(当日4000円)

JTA 会員 4000円(当日5000円) *JTA=日本トランスパーソナル学会

[懇親会] 一律 5000円

【大会参加費の支払い】

以下の口座に大会参加費、懇親会費をお振込み下さい。

(学会の年会費は必ず学会の口座に振り込んでください。この口座と一緒に振り込まないよう to してください)

参加費振込先：日本トランスパーソナル心理学／精神医学会
(ニホトランスパーソナルシリガク セイシイガクカイ)

○ゆうちょ銀行（郵便局）から振込の場合：

(記号番号：14100-32619731)

○ゆうちょ銀行以外から振込の場合：

ゆうちょ銀行 普通 四一八 (ヨンイチハチ) 店 3261973

振込は 11 月 30 日までに完了してください。それ以降は当日ご持参ください。当日参加費となります。

【研究発表希望の方】

発表希望者は 2018 年度までの会費を完納している学会会員および学生会員です。ただし学生会員は、指導教員などで学会会員である方の推薦がある人にかぎります。なお学生会員は学術誌への論文投稿ができません。論文投稿をする場合は学会会員になる必要があります。非会員の共同発表者は、事前に学会に入会をしていただく必要があります。その場合は学会事務局に連絡をしてください。

発表希望者は、抄録原稿を添付ファイルにて大会事務局 (jatp2019@gmail.com) までメールにてお送りください。発表時間は 30 分と 60 分の選択制とします。抄録原稿の

フォームは、学会HPよりダウンロードできます。(http://www.jatp.info/)

申し込みの締切りは 10 月 20 日 (土) とします。採否に関しては、発表内容を大会委員会で判断したうえでご連絡致します。

【大会参加・研究発表・分科会の申し込み先】

大会専用メールアドレス (発表申込み) : jatp2019@gmail.com

大会長 (問い合わせ専用) : nigo@rikkyo.ac.jp (濁川孝志)

年会費については学会事務局に直接お問い合わせください。 jatp@mail.goo.ne.jp